

# 「非飽和名詞」を含む構文の構造と派生

西垣内 泰介

gauchi@shoin.ac.jp

「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究発表会

2015年3月15日

## 1. 「非飽和名詞」「カキ料理構文」と「指定文」

- 「カキ料理構文」

(1) カキ料理は広島が本場だ。

- (2) a. 広島がカキ料理の本場だ。  
b. カキ料理の本場は広島だ。

本論文で主張するポイントは、「本場」のような「非飽和名詞」は2つの項をとり、外項（「カキ料理」）が主要部名詞「本場」の意味範囲を限定 (delimit) し、内項（「広島」）がその意味内容を「構成する」(constitute) または「過不足なく指定する」(exhaustively specify) という関係を持つ。

(3) [<sub>NP</sub>カキ料理 (の) [<sub>N'</sub>広島 (という) [<sub>N</sub>本場]]]

「非飽和名詞句」の内項が焦点化されることで「指定文」が、その指定部を占める外項が主題化されることで「カキ料理構文」が派生される。

焦点化された要素が変項を含む構成素の意味を「過不足なく指定する」という関係が「指定文」の性質を説明する上で決定的に重要な概念である。

## 2. 「指定文」と「非飽和名詞」

### 2.1. 「指定文」の特性

(4) What I am pointing at is a kangaroo. (Higgins 1973: 9, 例 (12))

「指定文」としての解釈 (predicational reading):

(5) That (animal) is a kangaroo. (Higgins 1973: 9, 例 (13))

「指定文」としての解釈 (specificational reading):

(6) What are you pointing at? (Higgins 1973: 10, 例 (15))

(7) I am pointing at the following thing: a kangaroo. (Higgins 1973: 10, 例 (16))

(8) 「疑似分裂文」の文頭の節は意味的「空所」(gap) (「変項」(variable)) を含むものであり、これが焦点要素によって埋められる、すなわち「指定」(specify) されなければならない。(Akmajian 1970: 19)

Den Dikken (2005: 311):

(9) 「指定的疑似分裂文」は次のもので構成される：

- 変項を含む構成素
- その変項の値を (過不足なく (exhaustively)) 指定する構成素
- その2つの主要構成素を連結するコピュラ

(10) [What<sub>x</sub> I am pointing at <sub>x</sub>] is a kangaroo.  
variable copula value of x

(11) I am pointing at a kangaroo.

Higgins (1973) は英語の名詞化表現 (nominalization) を含む「指定文」の分析を提示している。(Higgins 1973: 150, 例 (46))

- (12) a. John's dream is to better himself.  
b. My reason is that I don't have time.  
c. \*John's inability is to swim.  
d. \*My anger was that Bill had lied.

- (13) a. [<sub>NP</sub>John's dream [<sub>α</sub>to better himself]] is \_\_\_  
b. [<sub>NP</sub>My reason [<sub>α</sub>that I don't have time]] is \_\_\_  
c. \* [<sub>NP</sub>John's inability [<sub>α</sub>to swim]] is \_\_\_  
d. \* [<sub>NP</sub>My anger [<sub>α</sub>that Bill had lied]] is \_\_\_

(14) [<sub>NP</sub>John's dream <sub>x</sub>] is [<sub>α</sub>to better himself]  
variable copula value of x

(15) 補文がコピュラ文の述語補部の位置を占めることができるのは、その補文が主語の名詞句が指し示すものの内容 (content) ないし構成 (constitution) を与えるときである。(Higgins 1973: 150)

(16) 「指定文」の「焦点」は変項を含む構成素の意味内容を過不足なく (exhaustively) 指定していなければならない。

Den Dikken (2005: 311):

- (17) a. what John did was (John) read the newspaper  
 b. what did John do? — (John) read the newspaper

西山 (2003: 131): 「この構文は、『誰が (どれが)・・・であるか』という疑問文とそれにたいする答えを単一の文のなかで実現している文である」

- (18) カキ料理の本場 (がどこかと言えば, それ) は広島だ。

Karttunen (1977: 10):

- (19) (間接) 疑問文はその疑問文に対する真であり, 完全な (complete) 答えを合同して構成する (jointly constitute) 真である命題の集合をその外延とする (denote)。

Engdahl (1986: 154):

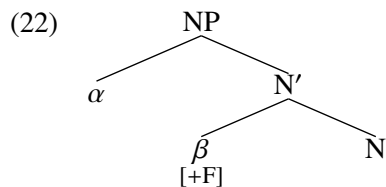
- (20) Who is coming to dinner?

Engdahl (1986: 154): 「この質問をした人は実際にディナーに来るのが John と Mary である場合に, ‘John.’ という答えでは納得しないだろう」 → 「答えの完全性」 (completeness of answers)

## 2.2. 「非飽和名詞」と「指定文」

- (21) パラメータを含んでいて, その値が具体的に定まらないかぎり, 外延を定めることができないタイプの名詞 (西山 2003: 269)

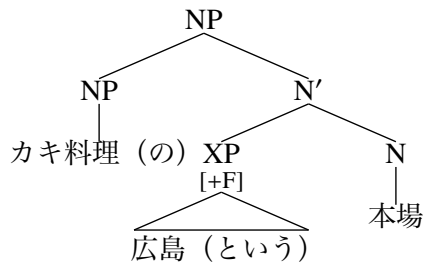
本分析では, 「非飽和名詞」と呼ばれている名詞は, 次のような 2 項をとる名詞句を形成してその主要部となると考える。



- (23) 非飽和名詞 N は, 外項  $\alpha$  が N の意味的領域を限定 (delimit) し, 内項  $\beta[+F]$  が  $\alpha$  によって限定された N の意味内容を「構成する」 (constitute) 意味内容を持つ範疇である。

- (2) a. 広島がカキ料理の本場だ。  
 b. カキ料理の本場は 広島だ。

(24)



外側の項  $\alpha$  として「カキ料理」が現れて、「本場」の意味領域、つまり何の本場であるかを限定 (delimit) する。内項  $\beta$  を占めるのが「広島」で、「カキ料理」によって限定された「本場」を「構成する」「過不足なく指定する」という関係が成り立っている。

(25) 広島が [カキ料理の  $x$  本場] だ。  
 value of  $x$                       variable                      copula

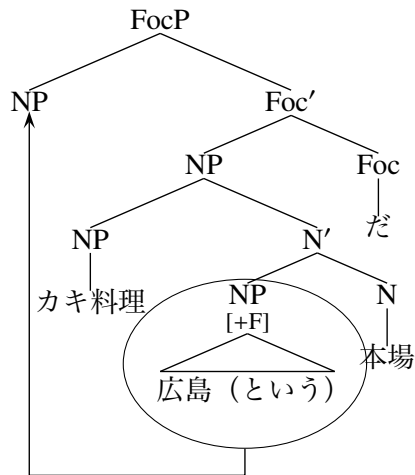
### 3. 「指定文」と「カキ料理構文」

#### 3.1. 「指定文」「カキ料理構文」の派生と統語的構造

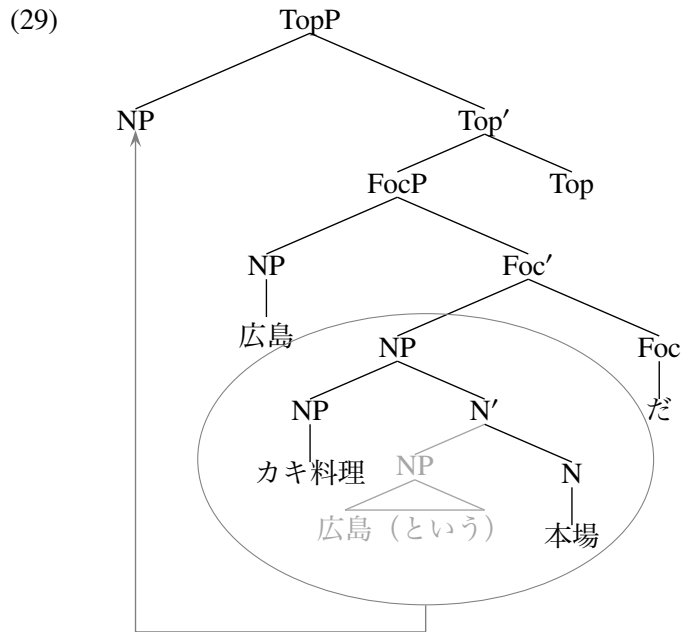
Hiraiwa and Ishihara (2012):

- (26) a. ナオヤがりんごを3個食べたのだ。  
 b. ナオヤが食べたのはりんごを3個だ。

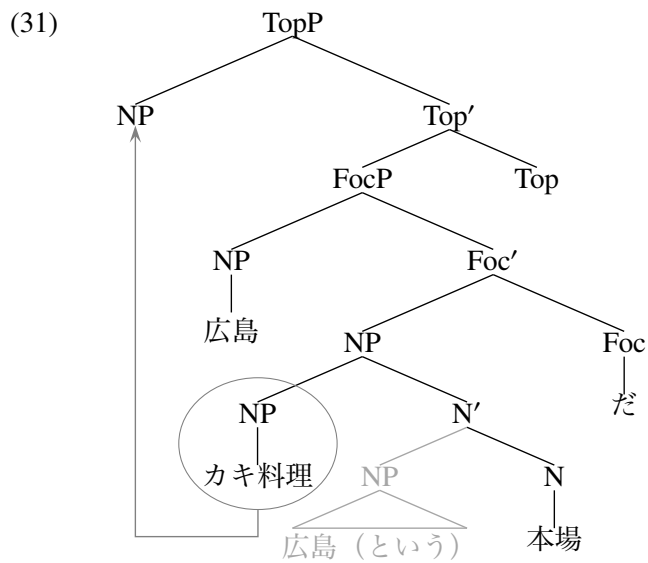
(27)



(28) 広島がカキ料理の本場だ。 = (2a)



(30) カキ料理の本場は広島だ。 = (2a)



(32) カキ料理は広島が本場だ。 = (1)

外項「カキ料理」が FocP 指定部に移動すると、非文法的な文が派生される。

(33) \*カキ料理が広島{の / という}本場だ。

(34) 広島は カキ料理の本場だ。

(35) \*広島は カキ料理が本場だ。

### 3.2. 「指定文」と「カキ料理構文」の対応

西山 (2003: 261): 「指定文『Yが, XのZだ』に対応してカキ料理構文『Xは, YがZだ』が文脈に存在するわけではない」

- (36) a. 花子が, この病院の看護師/医師だ。  
b. ?この病院は, 花子が看護師/医師だ。(西山 2003: 261, 例 (11ab))

(36a)を「指定文」として考えることが誤っているわけではない。2つの分析的可能性が考えられる。

- 「これら3人の中で誰がこの病院の看護師/医師ですか?」という質問に対する答えとして(36a)を用いることができる。

(37) [<sub>NP</sub> pro (この文脈で) [<sub>N'</sub> 花子 (という) [この病院の看護師/医師]]]

(38) 花子が [<sub>NP</sub> pro (この文脈で) [<sub>N'</sub> \_\_ [この病院の看護師/医師]]] だ。

(39) pro (この文脈では) 花子が [<sub>NP</sub> \_\_ [<sub>N'</sub> \_\_ [この病院の看護師/医師]]] だ。

- 問題の病院が看護師/医師がひとりしかいない病院であることを, 話者・会話の相手の双方が共通理解として知っている場合 → (36b)の容認性は低くない

三宅 (2011: 69)のように「(非)飽和性」を語彙的な素性と考えることには問題がある。

Den Dikken (2005: 328–9): 「過不足ない」(exhaustive) という特性は, は「含意」(implicature) に過ぎず, 文脈の中でキャンセルできるもの。

Collins (1991):

- (40) a. {What / The thing} the car needs is a new battery (? amongst other things / and it needs a new alternator too.)  
b. {All / The only thing} the car needs is a new battery (\* amongst other things / and it needs a new alternator too.)

- (41) a. O大学の学生がこのコンビニの利用者だ。  
b. このコンビニは, O大学の学生が利用者だ。

Engdahl (1986: 154):

(42) Where can I find an open gas station?

ガソリンスタンドの完全なリストを求めているのではない。

## 4. 先行研究との対比

西山 (2003: 276, (31)):

(43) 指定文「Yが, XのZだ」において, 「XのZ」が述語名詞句であるとき, Zが非飽和名詞で, Xがそのパラメータの値を表すときにかぎり, 対応するカキ料理構文「Xは, YがZだ」を構築することができる。

- (1) カキ料理は 広島が本場だ。  
(2) a. 広島がカキ料理の本場だ。  
b. カキ料理の本場は 広島だ。

西山 (2003: 260, (5)):

(44) カキ料理<sub>i</sub>は [広島が [e<sub>i</sub> の本場だ]]

西山 (2003: 260): 「[(1)] は [(2a)] からの主題化操作によって関係づけられている」

- (45) a. [<sub>FocP</sub> 広島が [<sub>NP</sub> カキ料理の [<sub>N'</sub> 広島 (という) [<sub>N</sub> 本場 ]]] だ] = (2a)  
b. [<sub>TopP</sub> カキ料理は [<sub>FocP</sub> 広島が [<sub>NP</sub> カキ料理の [<sub>N'</sub> 広島 (という) [<sub>N</sub> 本場 ]]] だ]] = (1)

## 5. 意味にかかわる問題

### 5.1. 「主役」 vs. 「端役」, 「総額」 vs. 「一部」

西山 (2003: 269) の「非飽和名詞」の定義:

- (21) パラメータを含んでいて, その値が具体的に定まらないかぎり, 外延を定めることができないタイプの名詞

#### 5.1.1 「主役」 vs. 「端役」

- (46) a. 某女優がこの芝居の主役だ。  
b. この芝居は, 某女優が主役だ。  
(47) a. あの男がこの芝居の端役だ。  
b. この芝居は, あの男が端役だ。

「あの男が端役だ」の「あの男」が「端役」の集合を「(過不足なく) 構成」しているとは言えないことが (47) の容認性が低いことの説明。

- (48) a. この芝居の 某女優という主役  
b. \*この芝居の その男という端役

#### 5.1.2 「総額」 vs. 「一部」

- (49) a. 100万円が慰謝料の総額だ。  
b. 慰謝料の総額は 100万円だ。  
c. 慰謝料は 100万円が総額だ。

- (50) a. 100万円が慰謝料の一部だ。  
 b. 慰謝料の一部は100万円だ。  
 c. 慰謝料は100万円が一部だ。
- (51) a. 51票が教授会の過半数だ。  
 b. 教授会の過半数は51票だ。  
 c. 教授会は51票が過半数だ。
- (52) a. あの男はこの芝居の端役だ。  
 b. 100万円は慰謝料の一部だ。

## 5.2. 「司会者」 vs. 「参加者」

(21)の必要条件による「非飽和名詞」の定義では、「主役」「端役」のほか、「司会者 vs. 参加者」、「監督 vs. 選手」などのペアのいずれも非飽和名詞であることを否定できない。

- (53) a. そのイベントは山田さんが{司会者/\*参加者}だ。  
 b. そのチームは山田さんが{監督/\*選手}だ。

「山田さん」が「司会者」「監督」の集合を「構成」するとは言えるが、「参加者」「選手」の集合を「(過不足なく)構成」するとは言えない。

Kageyama (2002: 202, (6)):

- (54) stage-level nouns (SLN):  
 住民, 難民, なじみ客, 該当者, 希望者, 欠席者, 利用者, 逮捕者, 犠牲者, 乗客,  
 客, けが人, 負傷者, 死亡者, 通行人, 行方不明者
- (55) a. その映画の製作途中, 主役がしばしば病気になった。  
 b. その映画の製作途中, 端役がしばしば病気になった。
- (56) a. そのイベントのあいだ, 司会者がひんぱんに退席した。  
 b. そのイベントのあいだ, 参加者がひんぱんに退席した。
- (57) a. そのイニング, 監督が何度も審判に抗議した。  
 b. そのイニング, 選手が何度も審判に抗議した。

## 6. 「自分」の逆行束縛

### 6.1. 現象

三宅 (2011: 106, 例 (7), (8)):

- (58) a. 自分<sub>i</sub>の父親が太郎<sub>i</sub>の誇りだ。  
 b. 自分<sub>i</sub>の長い髪が太郎<sub>i</sub>の自慢だ。



- (59) a. 太郎<sub>i</sub>の誇りは自分<sub>i</sub>の父親だ。  
 b. 太郎<sub>i</sub>の自慢は自分<sub>i</sub>の長い髪だ。

6.2. 「連結性」 (connectivity)

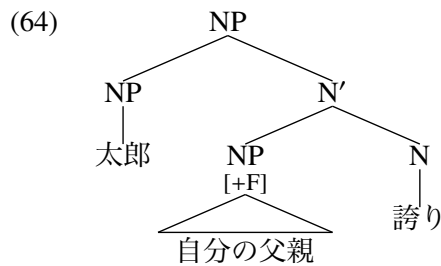
- (60) a. What John<sub>i</sub> is is important to himself<sub>i</sub>.  
 b. What John<sub>i</sub> is is important to him<sub>i</sub>.

(61) John<sub>i</sub> is important to himself<sub>i</sub>.

(62) \*John<sub>i</sub> is important to him<sub>i</sub>.

6.3. 「心理名詞」と「指定文」

- (63) a. 太郎の 自分の父親 (という) 誇り  
 b. 太郎の 自分の長い髪 (という) 自慢



(65) [<sub>FocP</sub> 自分の父親が [<sub>NP</sub> 太郎の [<sub>N'</sub> 自分の父親 (という) 誇り]] だ]

(66) [<sub>TopP</sub> [<sub>NP</sub> 太郎の [<sub>N'</sub> 自分の父親 (という) 誇り]] は [<sub>FocP</sub> 自分の父親が [<sub>NP</sub> 太郎の [<sub>N'</sub> 自分の父親 (という) 誇り]] だ]

(67) [<sub>TopP</sub> 太郎は [<sub>FocP</sub> 自分の父親が [<sub>NP</sub> 太郎の [<sub>N'</sub> 自分の父親 (という) 誇り]] だ]

(34) 広島は カキ料理の本場だ。

(68) \*自分<sub>i</sub>の父親は 太郎<sub>i</sub>の誇りだ。

(69) \*太郎<sub>i</sub>が自分<sub>i</sub>の父親の誇りだ。

(70) \* [<sub>NP</sub> 自分<sub>i</sub>の父親 [<sub>N'</sub> 太郎<sub>i</sub> (という) [誇り]]]

- (71) a. \*太郎<sub>i</sub>の {尊敬 / 軽蔑} は自分<sub>i</sub>の父親だ。  
 b. \*自分<sub>i</sub>の父親が太郎<sub>i</sub>の {尊敬 / 軽蔑} だ。

(72) \*太郎<sub>i</sub>の自分<sub>i</sub>の父親という{尊敬 / 軽蔑}

- (73) a. 太郎<sub>i</sub>の{尊敬 / 軽蔑}の対象は自分<sub>i</sub>の父親だ。  
b. 自分<sub>i</sub>の父親が太郎<sub>i</sub>の{尊敬 / 軽蔑}の対象だ。

(74) 太郎<sub>i</sub>の自分<sub>i</sub>の父親という{尊敬 / 軽蔑}の対象

(71) と (73) の対比は、「心理名詞」の中にも「非飽和名詞」として働くものとそうでないものがあることを示している。三宅 (2011) があげている「心理名詞」のリストを次に示す。

- (75) 心理名詞  
誇り, 自慢, 恐れ, 悩み, 喜び, 楽しみ

#### 6.4. 発話行為を表す名詞

(76) 発話行為を表す名詞

約束, 提案, 主張, 言明, 要求, 予告, 予言, 疑問, 質問 etc.

- (77) a. 自分<sub>i</sub>の降格が社長<sub>i</sub>の{約束 / 提案 / 主張 / 言明}だ。  
b. 社長<sub>i</sub>の{約束 / 提案 / 主張 / 言明}は自分<sub>i</sub>の降格だ。

- (78) a. 自分<sub>i</sub>の逃走用の旅客機が犯人<sub>i</sub>の要求だ。  
b. 犯人<sub>i</sub>の要求は自分<sub>i</sub>の逃走用の旅客機だ。

- 「自分」の長距離束縛 cf. Nishigauchi (2014), 西垣内 (2015a): 「自分」束縛は c 統御を要求する

- (79) a. 会社が自分<sub>i</sub>を降格することが社長<sub>i</sub>の{約束 / 提案 / 主張 / 言明}だ。  
b. 社長<sub>i</sub>の{約束 / 提案 / 主張 / 言明}は会社が自分<sub>i</sub>を降格することだ。

- (80) a. 首相が自分<sub>i</sub>に謝罪することが犯人<sub>i</sub>の要求だ。  
b. 犯人<sub>i</sub>の要求は首相が自分<sub>i</sub>に謝罪することだ。

- (81) a. C教授が自分<sub>i</sub>を引用したことがタカシ<sub>i</sub>の{自慢 / 誇り}だ。  
b. タカシ<sub>i</sub>の{自慢 / 誇り}はC教授が自分<sub>i</sub>を引用したことだ。

(82) [<sub>NP</sub> 社長<sub>i</sub>の [<sub>N'</sub> 自分<sub>i</sub>の降格 (という) [<sub>N</sub> {約束 / 提案 / 主張 / 言明} ]]]

(83) [<sub>FocP</sub> 自分<sub>i</sub>の降格が [<sub>NP</sub> 社長<sub>i</sub>の [<sub>N'</sub> 自分<sub>i</sub>の降格 (という) [<sub>N</sub> {約束 / 提案 / 主張 / 言明} ]]] だ]

(84) [<sub>TopP</sub> [<sub>NP</sub> 社長<sub>i</sub>の [<sub>N'</sub> 自分<sub>i</sub>の降格 (という) [<sub>N</sub> {約束 / 提案 / 主張 / 言明} ]]]] は [<sub>FocP</sub> 自分<sub>i</sub>の降格が [<sub>NP</sub> 社長<sub>i</sub>の [<sub>N'</sub> 自分<sub>i</sub>の降格 (という) [<sub>N</sub> {約束 / 提案 / 主張 / 言明} ]]] だ]

(85) \*<sub>[TopP]</sub> 社長<sub>i</sub>は <sub>[FocP]</sub> 自分<sub>i</sub>の降格が <sub>[NP]</sub> 社長<sub>i</sub>の <sub>[N'</sub> 自分<sub>i</sub>の降格 (という) <sub>[N]</sub> {約束 / 提案 / 主張 / 言明} ]]] だ]]

- 発話行為をあらわす名詞は行為やできごとをあらわし、状態性の基準を満たさないためと考えられる。

Grimshaw and Mester (1988) は「警告 (する)」という VN に次のような項構造を与えている。

(86) <Agent <Goal < Theme \_\_ >>>

- (87) a. 少年<sub>i</sub>[Agent] の 村人 [Goal] への オオカミが 自分<sub>i</sub>たちを襲いに来る [Theme] との警告  
b. 少年<sub>i</sub>が 村人へ [オオカミが 自分<sub>i</sub>たちを 襲いに来る] との警告をした。
- (88) a. [オオカミが 自分<sub>i</sub>たちを 襲いに来る] (という) ことが 少年<sub>i</sub>の 村人への警告だ。  
b. 少年<sub>i</sub>の 村人への警告は [オオカミが 自分<sub>i</sub>たちを 襲いに来る] (という) ことだ。

- Concealed questions

- (89) a. 自分<sub>i</sub>の新しいケータイ番号が そのお客<sub>i</sub>の {質問 / 疑問} だ。  
b. そのお客<sub>i</sub>の {質問 / 疑問} は自分<sub>i</sub>の新しいケータイ番号だ。
- (90) a. 自分<sub>i</sub>の新しいケータイ番号が何番かが そのお客<sub>i</sub>の {質問 / 疑問} だ。  
b. そのお客<sub>i</sub>の {質問 / 疑問} は自分<sub>i</sub>の新しいケータイ番号が何番かだ。

これらは、次のような名詞句の構造を中核として派生される。

(91) そのお客<sub>i</sub>の 自分<sub>i</sub>の新しいケータイ番号 (が何番か) (という) {質問 / 疑問}

- (92) a. \*自分<sub>i</sub>の降格が社長<sub>i</sub>の {否定 / 肯定 / 拒否 / 容認 / 是認} だ。  
b. \*社長<sub>i</sub>の {否定 / 肯定 / 拒否 / 容認 / 是認} は自分<sub>i</sub>の降格だ。

(93) \*社長<sub>i</sub>の 自分<sub>i</sub>の降格という {否定 / 肯定 / 拒否 / 容認 / 是認}

- (94) a. 自分<sub>i</sub>の降格が社長<sub>i</sub>の {否定項目 / 拒否項目 / 容認項目 / 是認項目} だ。  
b. 社長<sub>i</sub>の {否定項目 / 拒否項目 / 容認項目 / 是認項目} は自分<sub>i</sub>の降格だ。

(95) 社長<sub>i</sub>の 自分<sub>i</sub>の降格という {否定項目 / 拒否項目 / 容認項目 / 是認項目}

## 6.5. モダリティをあらわす名詞

- (96) a. 自分<sub>i</sub>の業務の遂行が従業員<sub>i</sub>の (最大の) 義務だ。  
b. 従業員<sub>i</sub>の (最大の) 義務は自分<sub>i</sub>の業務の遂行だ。

- (97) a. 自分<sub>i</sub>の幸福の追求が国民<sub>i</sub>の(究極の)権利だ。  
 b. 国民<sub>i</sub>の(究極の)権利は自分<sub>i</sub>の幸福の追求だ。
- (98) a. ?自分<sub>i</sub>の投票権の行使が国民<sub>i</sub>の{義務/権利}だ。  
 b. ?国民<sub>i</sub>の{義務/権利}は自分<sub>i</sub>の投票権の行使だ。
- (99) a. 従業員<sub>i</sub>は自分<sub>i</sub>の業務の遂行が(最大の)義務だ。  
 b. 国民<sub>i</sub>は自分<sub>i</sub>の幸福の追求が(究極の)権利だ。

#### 6.6. 人と人の関係をあらわす名詞

- (100) a. 自分<sub>i</sub>の息子がタカシ<sub>i</sub>の{上司/部下/弁護人/ライバル}だ。  
 b. タカシ<sub>i</sub>の{上司/部下/弁護人/ライバル}は自分<sub>i</sub>の息子だ。  
 c. タカシ<sub>i</sub>は自分<sub>i</sub>の息子が{上司/部下/弁護人/ライバル}だ。
- (101) a. 自分<sub>i</sub>の父親がタカシ<sub>i</sub>の{連絡先/訪問先}だ。  
 b. タカシ<sub>i</sub>の{連絡先/訪問先}は自分<sub>i</sub>の父親だ。  
 c. タカシ<sub>i</sub>は自分<sub>i</sub>の父親が{連絡先/訪問先}だ。
- (102) a. 自分<sub>i</sub>の息子がタカシ<sub>i</sub>の{テニス相手/テニス友だち}だ。  
 b. タカシ<sub>i</sub>の{テニス相手/テニス友だち}は自分<sub>i</sub>の息子だ。  
 c. タカシ<sub>i</sub>は自分<sub>i</sub>の息子が{テニス相手/テニス友だち}だ。

#### 7. 量化表現をふくむ束縛関係

- (103) a. そ<sub>i</sub>の発祥地が(すべての)民族音楽<sub>i</sub>の本場だ。  
 b. (すべての)民族音楽<sub>i</sub>の本場はそ<sub>i</sub>の発祥地だ。  
 c. (すべての)民族音楽<sub>i</sub>はそ<sub>i</sub>の発祥地が本場だ。
- (104) \* (世界の民族音楽のフェスティバルで,) そ<sub>i</sub>の愛好者と演奏者が(すべての)民族音楽<sub>i</sub>を楽しんだ。

- (105) [<sub>NP</sub> (すべての)民族音楽<sub>i</sub> [そ<sub>i</sub>の発祥地(という)本場]]

疑問文の「関係的解釈」(relational interpretation) (Engdahl 1986: 325, (3)):

- (106) Q. Which woman does *no man* love?  
 A. *His* mother-in-law.

このような「関係的解釈」の疑問文とその答えを内包しているのが、次の Geach (1962) によって議論されている「指定文」である。

- (107) The woman that every Englishman loves is his mother.

われわれの「指定文」(103ab)に対応する「関係的解釈」の疑問文と答えにあたるのが次の対話である。

(108) Q. 民族音楽の本場は (たいてい) どこですか？

A. その発祥地です。

ここでも、「指定文」と疑問文およびその答えの関係の間の平行した特性を見ることができるのである。

## 8. Pro に関連する議論

(109) 山河ワタルです。〇〇大学大学院で意味論の勉強をしています。

- a. 鈴木教授が指導教員です。
- b. #鈴木教授は指導教員です。
- c. 指導教員は鈴木教授です。
- d. #指導教員が鈴木教授です。

(110) [<sub>NP</sub> pro [<sub>N'</sub>鈴木教授 (という) 指導教員 ]]

Kuroda (1992):

- (111) a. [pro 大麻を買うこと] は 禁じられている。  
b. [子どもが pro 買うこと] は 禁じられている。

- 任意の指示 (arbitrary reference) の pro: cf. Hasegawa (1984), Huang (1984)

- (112) a. [<sub>VNP</sub> pro その町の 破壊] は, 失敗だった。  
b. [<sub>VNP</sub> 敵軍の pro 破壊] は, 失敗だった。

(113) [<sub>FocP</sub>鈴木教授が [<sub>NP</sub> pro [<sub>N'</sub>鈴木教授 (という) 指導教員 ]] です]

(114) [<sub>TopP</sub> pro [<sub>FocP</sub>鈴木教授が [<sub>NP</sub> pro [<sub>N'</sub>鈴木教授 (という) 指導教員 ]] です]]

空主題を持つ「カキ料理構文」

(115) [<sub>TopP</sub>[<sub>NP</sub> pro [<sub>N'</sub>鈴木教授 (という) 指導教員 ]] は [<sub>FocP</sub>鈴木教授が [<sub>NP</sub> pro [<sub>N'</sub>鈴木教授 (という) 指導教員]] です]]

(116) 先生は 患者さんだと 医者と言い。(『毎日新聞』読者川柳 (2015年3月2日))

- a. (自分の) 患者が先生だ。
- b. 先生は (自分の) 患者だ。

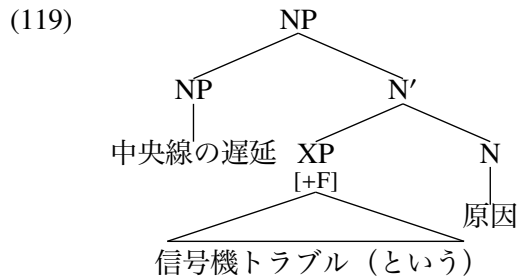
(117) [pro [ (自分の) 患者 (という) ] 先生]

- (116') a. 子は親の鏡  
 b. [pro [親の鏡 (という) [子]]]  
 c. 親の鏡が [pro [親の鏡 (という) [子]]] だ

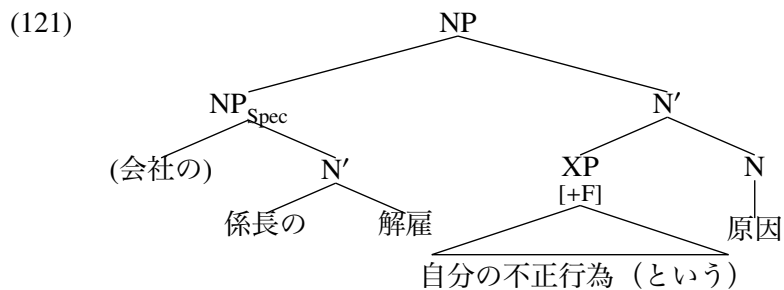
## 9. 事象・命題の関係を表す非飽和名詞

西川 (2013):

- (118) a. 信号機トラブルが中央線の遅延の原因だ。  
 b. 中央線の遅延は信号機トラブルが原因だ。



- (120) a.?\*自分<sub>i</sub>の不正行為が会社による係長<sub>i</sub>の解雇の原因だ。  
 b.?\*会社による係長<sub>i</sub>の解雇の原因は自分<sub>i</sub>の不正行為だ。  
 c.?\*会社による係長<sub>i</sub>の解雇は自分<sub>i</sub>の不正行為が(その)原因だ。



## 10. XをYに...する

### 10.1. コントロール

- (122) a. 地図をたよりに, 人をたずねる。(三宅 2011: 75, 例 (23))  
 b. その男は 私を相手に 冗談ばかり言っていた。(三宅 2011: 75, 例 (26))

(123) [<sub>NP</sub> pro [<sub>N'</sub> 私 (を) 相手]] に

(124) 自分<sub>i</sub>の昇任を誇りに, 山田くん<sub>i</sub>は営業成績を上げつづけた。

(124') [pro<sub>i</sub> [自分<sub>i</sub>の昇任を誇り]] に、山田くん<sub>i</sub>は営業成績を上げつづけた。

(125) ?\*自分<sub>i</sub>の昇任を誇りに、山田くん<sub>i</sub>の営業成績が上がった。

(126) 三宅 (2000: 81):

Y は、S 中のいずれかの項と同一の指標を持つ空の代名詞 (pro) の限定を受けており、その空の代名詞は Y が [-飽和性] の場合にのみ認可される。

X を (pro<sub>i</sub> の) Y に、[<sub>S</sub> ... Arg<sub>i</sub> ...] (“Arg” は “項” を表す)

## 10.2. 「事象」を含む関係

- (127) a. 住民の通報が犯人逮捕のきっかけだった。  
b. 犯人逮捕のきっかけは住民の通報だった。  
c. 犯人逮捕は住民の通報がきっかけだった。

- (128) a. 住民の通報をきっかけに、警察が犯人の居場所をつきとめた。  
b. 住民の通報をきっかけに、犯人の居場所が（警察によって）つきとめられた。  
c. 住民の通報をきっかけに、犯人の居場所が判明した。

(129) [<sub>NP</sub> pro [<sub>N'</sub> 住民の通報 [<sub>N</sub> きっかけ]]]

外項の pro が主節の特定の項ではなく、主節全体をコントロールすると考えれば、(128a-c) の例文の特徴を捉えることができる。

「横方向移動」 (sideward movement) cf. Hornstein (2001)

(130) [<sub>NP</sub> 犯人の居場所が判明した (こと) [<sub>N'</sub> 住民の通報 [<sub>N</sub> きっかけ]]]

この名詞句の指定部を占める節 (IP) を「横方向移動」によってコピーする。

(131) [<sub>NP</sub> 犯人の居場所が判明した (こと) [<sub>N'</sub> 住民の通報 [<sub>N</sub> きっかけ]]] [<sub>IP</sub> 犯人の居場所  
が判明した]

これによってできた左側の構成素 (NP) と右側の IP をマージし、コピーの元位置の要素の音形を削除することで最終的な出力が得られる。

(132) [<sub>NP</sub> 犯人の居場所が判明した (こと) [<sub>N'</sub> 住民の通報を [<sub>N</sub> きっかけ]]] に [<sub>IP</sub> 犯人の  
居場所が判明した]

(133) チャドとスーダンを舞台に、両超大国のつばぜり合いが激化している。(三宅 2011:  
75, 例 (25) を改訂)

「舞台」は「つばぜり合い」の「事象」と「チャドとスーダン」という「場所」の関係を表す「非飽和名詞」である。

### 10.3. 「肴」「素材」

- (134) a. 天ぷらと刺身を肴に、日本酒を酌み交わした。  
b. 包装用のプラスチックを素材に作り上げたこの製品。

三宅 (2011: 75–6): 「[(134a)] は“日本酒の肴”とは言えるが“日本酒を酌み交わした肴”とは解釈しにくいし, [(134b)] は“作品の素材”ならよいが, “この作品を作り上げた素材”はおかしい」

- (135) a. 日本酒を酌み交わした (ときの) 天ぷらと刺身という肴  
b. この製品を作り上げた (ときの) 包装用のプラスチックという素材
- (136) a. ??天ぷらと刺身を肴に、日本酒を3合注文した。  
b. ??包装用のプラスチックを素材によく売れているこの製品。
- (137) するめと缶詰を肴に、飲み会 (??パーティ) が朝までつづいた。

### 10.4. 「理由」

- (138) 「体力の限界」を理由に、同力士が引退届を提出した。
- (139) a. 「体力の限界」が同力士が引退届を提出した (ことの) 理由だ。  
b. \* 「体力の限界」が同力士の理由だ。
- (140) [<sub>NP</sub> 同力士が引退届を提出した (ことの) [<sub>N'</sub> 「体力の限界」 (という) [<sub>N</sub> 理由]]
- (141) a. 「体力の限界」を理由に、同力士によって引退届が提出された。  
b. \* 「体力の限界」を理由に、引退届が事務局に届いた。  
c. \* 「体力の限界」を理由に、引退届の提出があった。
- (142) ?? 「体力の限界」を理由に、理事長が引退届を受理した。
- (143) 書式の不備を理由に、理事長が引退届を棄却した。
- 久野 (1978), Sells (1987), 西垣内 (2015b) などで分析されている「主観的表現」:
- (144) [ヨシコが不可解にもつけ回していること] がタカシをいらだたせている。 (Sells 1987: (50))
- 西垣内 (2015a,b) は、「不可解」は「視点投射」(Speas 2004) のひとつ「証拠性」投射 (Evid(ential)) と「一致」の関係を持つと考える。
- (145) [<sub>EvidP</sub> pro<sub>i</sub> [... 不可解<sub>i</sub> ...] Evid<sub>i</sub>] ... タカシ<sub>i</sub> ...
- (146) a. 大学の不可解な人事を理由に、鈴木教授が辞職した。  
b. 大学の不可解な人事をきっかけに、鈴木教授が辞職した。



- (147) [<sub>NP</sub>鈴木教授<sub>i</sub>が辞職した (ことの) [<sub>N'</sub>[<sub>EvidP</sub>pro<sub>i</sub> [大学の不可解<sub>i</sub>な人事] Evid<sub>i</sub>] (という) [<sub>N</sub>理由]]]
- (148) a. 大学が不当に自分<sub>i</sub>を譴責したことを理由に 鈴木教授<sub>i</sub>が辞職した。  
b.??大学が不当に自分<sub>i</sub>を譴責したことをきっかけに 鈴木教授<sub>i</sub>が辞職した。
- (149) a. 大学が不当に自分<sub>i</sub>を譴責したことが 鈴木教授<sub>i</sub>の辞職の理由だ。  
b.??大学が不当に自分<sub>i</sub>を譴責したことが 鈴木教授<sub>i</sub>の辞職のきっかけだ。
- (150) 大学が不当に自分<sub>i</sub>を譴責してしまったことが 鈴木教授<sub>i</sub>の辞職のきっかけだ。

### 参 照 文 献

- Akmajian, Adrian (1970) Aspects of the grammar of focus in English. Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Collins, Peter C (1991) *Cleft and pseudo-cleft constructions in English*: Routledge.
- Den Dikken, Marcel (2005) Specificational copular sentences and pseudoclefts. In: Everaert, Martin and Henk van Riemsdijk (eds.) *The Blackwell companion to syntax 4*, 292–409: Blackwell Publishing.
- Engdahl, Elisabet (1986) *Constituent questions: The syntax and semantics of questions with special reference to Swedish*. Dordrecht: Springer.
- Geach, Peter Thomas (1962) *Reference and generality*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Grimshaw, Jane and Armin Mester (1988) Light verbs and  $\theta$ -marking. *Linguistic inquiry*, 205–232.
- Hasegawa, Nobuko (1984) On the so-called “zero pronouns” in Japanese. *The Linguistic Review* 4, 289–341.
- Higgins, Francis Roger (1973) The pseudo-cleft construction in English. Ph.D. dissertation, MIT. Cambridge, Mass.
- Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara (2012) Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15 2, 142–180.
- Hornstein, Norbert (2001) *Move! A Minimalist theory of construal*: Blackwell.
- Huang, James C.-T. (1984) On the distribution and reference of empty pronouns. *Linguistic Inquiry* 15, 531–574.
- Kageyama, Taro (2002) Agent nominals and the organization of the lexicon. 『英米文学』 46, 2: 198-224.

- Karttunen, Lauri (1977) Syntax and semantics of questions. *Linguistics and Philosophy* 1 1, 3–44.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』 大修館, 東京.
- Kuroda, S-Y (1992) What can Japanese say about government and binding? In: *Japanese Syntax and Semantics*, 240–252: Springer.
- 三宅知宏 (2000) 「名詞の「飽和性」について」『国文鶴見』 35: 89–79.
- 三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェイス』 くろしお出版, 東京.
- Nishigauchi, Taisuke (2014) Reflexive binding: Awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics* 23, 157–206.
- 西垣内泰介 (2015a) 「エンパシーと阻止効果—「自分」の束縛と「視点投射」—」『言語研究』 146: 109–133.
- 西垣内泰介 (2015b) 「ロゴフォリック階層と視点投射」 *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 18: 85–102.
- 西川賢哉 (2013) 「非飽和名詞を主名詞とする連体修飾節構造の意味表示」西山佑司 (編) 『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』 : 29–50 東京 : ひつじ書房.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』 ひつじ書房, 東京.
- Sells, Peter (1987) Aspects of Logophoricity. *Linguistic Inquiry* 18, 445-479.
- Speas, Margaret (2004) Evidentiality, logophoricity and the syntactic representation of pragmatic features. *Lingua* 114.3, 255-276.